

氏名（本籍）	菅野 倫匡
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博甲第 9768 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	現代日本語の文章における漢字使用の実態に関する通時的・計量的研究

主査	筑波大学	教授	博士（言語学）	矢澤 真人
副査	筑波大学	教授	博士（言語学）	杉本 武
副査	筑波大学	准教授	博士（言語学）	橋本 修
副査	国立国語研究所	教授	博士（学術）	山崎 誠

論文の要旨

本論文は、日本語の文章における漢字使用に関する、コーパスを利用した計量的研究である。時代的には先行研究の調査結果の援用を含めると、概ね 1900 年代前半から 2015 年までを対象に、漢字含有率を軸に、現代日本語表記の通時的変遷の分析が行われている。

本論文は序章、終章含め以下の 8 章からなる。

序章

第 1 章 先行研究の概観

第 2 章 用語の定義

第 3 章 小説の漢字含有率は減少し続けるのか

第 4 章 小説の漢字含有率はなぜ安定したのか

第 5 章 新聞の漢字含有率は如何なる傾向にあるのか

第 6 章 漢字含有率に見る現在の漢字使用の実態

終章

序章では本論文の目的、論述に当たっての立場、本論文の構成について整理した形で述べられる。目的については「現代語の文章における漢字使用の実態を通時的・計量的な観点から解明すること」とし、具体的な指標としては漢字含有率を用いることが示される。

第 1 章では先行研究の検討が行われる。先行研究を「小説を対象として漢字含有率を調査した研究」「統計的な手法について論じた（疑問を呈した）研究」「漢字含有率以外の視点を導入することの必要性を指摘した研究」「小説以外を対象に漢字含有率を調査した研究」に分け、それぞれの成果・問題点を整理して本論文の方針との関わりが示される。

第 2 章では、「字」「文字」「字種」「漢字含有率」等、計量に際して必要な用語について、先行研究を参照・検討しつつ定義が与えられる。「漢字含有率」については、分子を「漢字の延べ字数」、分母を「ひらがなの延べ字数・カタカナの延べ字数・延べ英数字数・漢字の延べ字数の総和」とし、分母に延べ句読点数を含めない宮島(1988a)の定義を採用することが示される。

第3章では、小説を対象に、漢字含有率を実際に調査し、現在に至るまでの漢字使用の実態が明らかにされる。具体的には宮島(1988a)の調査との継続性を勘案しながら、1986年ー2015年の芥川賞作品66篇について調査と分析が行われる。サンプリングは概略、各作品から10ページずつを選び、その各ページの3行目からそれぞれ100字をとるという形で採取され、光学文字認識ソフトを用いた電子テキストを目視で補正するなどの処置が行われている。このような形で調査した結果として、各作品における1000字に占める字種ごとの延べ字数が算出され、相関分析、Kruskal-Wallis検定、蛇行箱形図作成によって分析が進められる。分析の結果、①作品の受賞年と作品の漢字含有率、作者の誕生年と作品の漢字含有率いずれにも相関が認められないこと、②時期によって分けた6つの区分内の作品における漢字含有率についてのKruskal-Wallis検定の結果は有意差がないこと、③作成した蛇行箱形図において、中央値の軌跡・上下ヒンジの軌跡ともに横ばいであると見なせることが示され、当該期間において漢字含有率は安定していると結論づけられている。

第4章では、第3章の結果を踏まえ、1986年から2015年までの漢字使用率が安定した要因についての探究が行われる。宮島(1988a)他により、20世紀中葉までは漢字含有率に減少傾向が見られることが示されたが、本論文の第3章の調査では、1986年ー2015年においてはその減少傾向が見られないことが明らかになっている。本章では、その傾向性の変化の要因について、主として語種に着目して分析が進められる。まず、調査対象となる作品の期間やサンプルの抽出方法、形態素解析器MeCab(Ver.0.996)を用いた語種認定とその補正など、調査・分析の手法を示した上で、「和語字数」「漢語字数」「外来語字数」等、分析に必要となる数値を算出・分析する手順が示される。こうした調査・分析を1935年ー1985年までの芥川賞作品にほどこして、そこで得られた結果から傾向性変化の要因が検討される。この結果、1935年ー1985年と1986年ー2015年(一部1979年ー2015年)の二つの期間に、語種の顕著な違いが見られること、前者では、「漢字表記漢語」の減少が見られるのに対し、後者では「漢字表記漢語」の推移が横ばいになっており、これが漢字含有率減少傾向の阻止要因となっていることが示される。

第5章では新聞という、小説とは異なる媒体における漢字含有率の変遷について、第3章の調査とほぼ同じ1985年ー2015年、毎日新聞を調査資料とし、5年ごとに特定の曜日に偏らない等の制約をつけた上で、ランダムに12日を指定し、それぞれの日の朝刊一面トップ記事を抽出する形で調査・分析が行われる。採取したサンプルを、概ね第3章と同様の方法で調査・分析した結果、①上記期間における蛇行箱形図においてゆるやかな減少傾向が見られること、②箱ひげ図においては、1995年と2000年との間に目立った下降が見られ、この期間は1996年の数字表記の移行(漢数字使用から算用数字使用への移行)期に当たること、③分子から数詞を除いた漢字含有率を算出した結果を蛇行箱形図にすると減少傾向が見られなくなること、といった現象が指摘される。この結果から、上記期間において当該資料の漢字使用率は減少するが、その主要因は数字表記の移行によるものであり、それ以外については漢字使用率は概ね安定している、と結論づけている。

第6章では小説を対象とした第3・4章と、新聞を対象とした第5章の結果を合わせ、漢字含有率を通して見た漢字使用の実態が整理される。新聞においては、特定時期に漢数字から算用数字への移行という言語外的・人為的要因が漢字含有率に大きく影響しており、小説では第3章で見たように1986年以降、漢字含有率が安定しているという対比があることが示されるとともに、漢字含有率の絶対値が小説より新聞の方が高いことも示される。従来、示唆されていた漢字含有率が文章のジャンル・媒体の影響を受けることが大量データの上でも確認できることが述べられる。

第7章では本論文の結論がまとめられたのち、残された課題と今後の展望について示される。

審査の要旨

1 批評

日本語表記に関する計量的研究は、表記の実態をつかむ有力な方法として重要性が指摘されているにもか

かわらず、技術的困難さや労力のコストの問題等から、本格的な調査が行われることの少ない領域である。このような中、本論文は、特に本格的な調査・分析が手薄である 1980 年代以降について、漢字含有率の変遷を中心に確実な調査結果を得、興味深い知見を提示した重要な研究である。

本論文の優れた点は計量技術の向上と、言語学的背景への目配りの充実という 2 点に大別される。まず第一点の計量技術の向上については、先行研究における手法をすべて吟味し、調査対象の選定については宮島 (1988a)、分析方法については石井 (2013) を踏まえながら洗練して、現時点における最善の調査・分析手法を策定したと言える。漢字含有率を中心的な論点とした、小説における表記の計量的研究はつとに安本 (1963) が有名であるが、これを端緒とした一連の諸研究の中で、安本が指摘した小説における漢字含有率の下降が現在も続いているのかという論点も生じ、この点について 1960 年頃から減少が止まっているとする宮島 (1988a) の主張と、少なくとも 2000 年までは減少が続いているとする中村 (2003) の主張が対立していた。このような中で、手法を改善し精度を上げた本論文において、1986 年ー2015 年の間において安定しているという結果が得られたことは、この論点について、これまでより信頼性の高い一つの答えが出たという意味で、非常に意義深い。

第二点、言語学的背景への目配りの充実については、具体的には以下の諸点が挙げられる。まず、調査対象の選定について、宮島 (1988a) との継続性から小説としては芥川賞作品を選んだ点、小説との比較対象として新聞を選んだ背景として、「執筆者の自由度において概ね両極にある」ということを念頭に置いている点、いずれも直接的な論点についての妥当性、今後の調査計画との整合性にとって重要な配慮である。また、先行研究において薄かった言語外的要因への洞察から、新聞における漢字含有率減少の主要因が 1996 年の数字表記の移行にあること、この要因を除いて再計算すると、小説において漢字と量的補完関係にあるのはひらがなであるが、新聞において漢字と補完関係にあるのはカタカナであるという、媒体の特性を浮き彫りにした統計分析結果を得るという点は、非常に優れた成果である。

一方、統計的事実に対して、もう少し踏み込んだ解釈が欲しいと思われる箇所もいくつか見られる。例えばいくつかの調査の結果からは、漢字含有率以外の指標について、当該期間中に変化が垣間見られるような点もありそうに見られるが、そのような点についての言及は極めて少ない。しかしながらそのような問題点は、絞り込まれた論点について、最善の調査・分析手法を策定し、信頼性の高い結論を確実に得る、という本論文の美点を示すとも言え、先行研究において見解の分かれていた論点について明確に一つの結論を提供したという点で、学界へのインパクトの大きい、高く評価できる研究であることは十分に保証される。

2 最終試験

令和 3 年 1 月 21 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について筆者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、筆者は博士 (言語学) の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。